

が偶然に左右されつつ、情報を蓄積している段階だが、これらを網羅的に非破壊で取り出し、表紙裏反故データベースなどを構築できないかと夢想する。

このように中近世日本における絵入り本はいまだ謎に満ち、新たな書物文化の風景が描かれるのを待っているように思われる。

第五八二回 二月三日（木）

### 絵で読む能——東洋文庫蔵

#### 「観世流絵入謡本」熟覧——

成城大学教授 大谷 節 子

絵入謡本、能絵本、能絵巻と呼ばれるものは、謡と所作（舞）と囃子からなる能の舞台空間を平面化したものである以上、能の表現を超えることは難しい。しかし、これはあくまで完全形態としての能を中心に置いた視点である。演能のための相伝本としてではなく、読むための、また調度品としての謡本が作られた室町後期以降の謡本制作史においては、絵入謡本はその最も豪華な発展形として位置付け

ることができる。光悦謡本が版本の豪華謡本の極であるのに対して、紺地に金銀泥表紙を持ち、下絵入り料紙に本文が墨書される絵入謡本は、写本の豪華謡本の極にある。

本講座で取り上げた東洋文庫所蔵の『観世流謡本 六番（絵入）』は、こうした絵入謡本の最も美しい形を今に伝える六冊である。この本の絵の料紙は本文部分とは別の打紙楮紙で、本文の料紙の糊代に貼られて全体は袋綴状に仕立てられており、絵と本文は別々に製作された後、製本されたことが窺われる。袋綴ではないが、神戸女子大学古典芸能研究センター所蔵の絵入謡本十二帖も、同様の工程が想定される。

講座では六冊の内、「三井寺」を熟覧した。この本文は元頼本系統の上掛り系謡本に一致する。この系統の謡本は、所作を伴わずに舞台が再現可能な、謡のための本として整備された特徴を持っている。絵と本文が別の所で製作されたことは先に述べたが、予め絵を入れる箇所を決めた上で本文が書かれたことは、絵へと続く直前の本文が散らし書きになっていることから察し得る。東洋文庫所蔵六冊の内、この「三井寺」のみに節が付されているが、節記号は後筆である。九丁才は前述した散らし書きの箇所であるが、本文の筆者は「かげはさながら」からが「次第」と呼ばれる別の小段であることに配慮せず筆を走らせており、この

ことから小段の名や役名（「三井寺」の場合は節も）が後補であることが知られる。

絵と実際の舞台との差異に注目すると、興味深いことが見えてくる。本来三次元で動きがあるものを、二次元の絵画に封じ込める場合、そこに何を描くことができ、何が抜け落ちてしまうのか。能と絵の間を読むことは、能が何を表現したものであるか、何を表現することが可能なものなのかを知る手掛かりを教えてくれるからである。

「三井寺」の前場冒頭の「南無や観世音……」という祈請の言葉によって、シテの狂女が参籠した場所が清水寺であることは自明の事柄なのであるが、三丁ウに位置する第一図では、清水寺の表徴である舞台が描かれていない。能では、アイ狂言役者の名乗りによってシテが霊夢を受けた場所が清水寺であることが説明されるが、謡本ではアイ狂言の台詞は省略されるのが常であり、この絵入謡本も「シカ／＼」と記すのみである。謡本には清水寺の名が示されていないために、絵師は前場が清水寺であることを認識していなかった可能性がある。

また、十七丁才第五図に描かれる侍烏帽子の男の一人は口を大きく開けて声を上げ、一人は棒でシテの狂女を打擲し、地面に打ち倒している。能では鐘を撞こうとするシテをワキツレの僧が扇で制止し、シテは数歩退いて安座する

場面である。十九丁ウ第六図が描く大団円の終曲場面では、僧侶も武士もにこやかな顔で描かれ、母に再会した千満の髪型もそれまでとは変わっている。能の動きは抽象化の一端を辿り、観客は謡の内容を耳で聴いて型に意味を与えていくが、絵入謡本の登場人物たちは能の舞台の制約を受けることなく、謡の内容に従って自在に動いている。

さて、このような絵入謡本は、現在絵巻に改装されたものを含め十数種が知られており、いずれも一冊から数冊の単位で現存する。これを以て本来百番揃いで製作されたとの推測もなされているが、しかし、東洋文庫所蔵のような絵入謡本が百番を単位とする揃い本の形で数多く制作されていたかどうかについては、慎重にならざるを得ない。豪華本が多く残っている幸若絵本とは違い、能の舞台は二場面、間狂言を入れてもせいぜい三場面に過ぎず場面展開に乏しく、多くが単調な図柄になってしまう。一方で、各曲の見せ場を一図ずつ描いた能狂言画帖や図巻は数多く現存する。一図ずつを描く画帖や図巻は簡便に多くの作品が一覧でき、絵入謡本に比して製作費も安価で量産可能であったために、この形態が主流となっていたことは想像するに難くない。絵入謡本は、製作当時より稀少さは現存状況が示す通りであったものと思われる。